

2021年9月6日

研究休暇報告書

南山大学長

ロバート・キサラ殿

英語教育センター

教授 中田晶子

研究休暇報告書をここに提出いたします。

1. 期間

2020年9月1日～2021年8月31日

2. 研究課題

- (1) Vladimir Nabokov の作品に隠された分析哲学者の研究
- (2) Vladimir Nabokov の初期作品における超自然的存在の表象の研究

3. 研究活動

コロナ禍の影響により予定していた海外での資料調査や国際学会への参加がかなわなかったため、2020年度は国内で可能な文献の収集と精読を中心とし、科研の研究課題でもある(1)の成果発表の場としての国際シンポジウムの準備を進めた。『アカデミア』論文「変奏と変装—*Transparent Things*の固有名詞」(2021年1月)は、シンポジウムで論じる分析哲学者以外の、同小説に登場する Moore 名について論じたものであり、(1)への前段としての役割を有している。

2021年度に実施した国際シンポジウム“Vladimir Nabokov and Analytic Philosophy”は、作家 Nabokov と分析哲学を扱うプロジェクトとして世界で初めてのものである。長年にわたりナボコフ研究をリードし、哲学にも造詣の深い Brian Boyd 教授 (Auckland 大学)と Zoran Kuzmanovich 教授 (Davidson 大学)に報告を、分析哲学を専門とし、国内外の他分野の研究者との共同プロジェクトの経験が豊富な小山虎講師 (山口大学)にコメンテーターを依頼した。両教授と小山講師からは、準備期間中にも貴重な情報や指導、援助を受けた。

シンポジウムは、報告者の所属する日本ナボコフ協会の年次大会のプログラムとして、2021年5月15日から2週間の予定で協会 Web ページ上での文書提示の形式で行われた。

Zoom による開催の予定を変更したのは、2 月以来入退院を重ねられた Kuzmanovich 教授の体調に配慮してのことである。Boyd 教授は、Nabokov と Karl Popper の思想と志向性を比較し、Kuzmanovich 教授は、Nabokov と Greory Currie を Empathy 論の観点から、それぞれ論じた。報告者は Nabokov 後期の小説に隠された Ludwig Wittgenstein と G. E. Moore について論じ、司会も担当した。

Zoom による実施の場合には、休憩を含めて 4 時間程度の予定であったが、文書提示となったためにコメントや質疑応答が質量共に非常に充実したものとなり、参加者からの希望もあったため、会期を 6 月 20 日まで延長した。掲載したファイルは 40 を超え、口頭での実施に換算すると 11 時間以上語り続けたことになる。報告、コメントと応答、参加者からの質疑と応答のすべてを収録したプロシーディングスを成果として残すこととし、現在編集作業を進めている。

研究課題(2)に関しては、他に類を見ない動物的な存在としての天使が登場する初期の短篇“Wingstroke”を論じた論考が、2022 年に作品社より出版されるナボコフの短篇をテーマとした論集に収録予定となっている。

国際学会関連では、研究発表を予定していた The International Vladimir Nabokov Society (IVNS) のアメリカで開催される学会は来年に延期となったが、Zoom による開催となった Modern Language Association の年次大会 (2021 年 1 月 7 日～11 日、大会テーマ“Persistence”) やサンクト・ペテルブルグの Nabokov Museum が毎年開催する Nabokov Seminar (2021 年 5 月 22 日、テーマ“The *Lolita* Effect: Nabokov's Novel in Art and Public Discourse Today”) に参加することができた。

IVNS 初代会長であった Don Barton Johnson 博士の追悼式が 2021 年 2 月 28 日に Zoom により行われた。日本ナボコフ協会としても研究者個人としても Johnson 博士には多大な援助や指導を受けていた。IVNS の Web ページに追悼文を寄稿すると共に、追悼式に出席して日本からも弔意を示すことができた。

末尾ながら、コロナ禍の時期にもかかわらず、一年間の研究休暇をいただいたことを心より感謝いたします。